

韓国人日本語学習者の無意味語のアクセント
Accent patterns of nonsense words spoken by Korean

高橋 宜子

Yoshiko Takahashi

早稲田大学大学院日本語教育研究科修士課程：〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-7-1

Graduate School of Japanese Applied Linguistics, Waseda University

: yoshiko__takahashi@hotmail.com

Abstract : Korean occasionally speaks the first and second moras in same pitch in their Japanese speech. Therefore, this study is analysis of spoken datum by Korean who studies Japanese and investigates if the environment of initial vowel or consonant affects the pitch pattern. As a result, it is found when the initial environment is vowel and nasal consonant, the pitch pattern of initial two moras tends to be Low-High. While the initial environment is voiceless fricative and voiceless plosive, the pitch pattern tends to be High-High. In this paper, I report about details of the result.

キーワード：韓国人日本語学習者、語頭、上昇、無意味語

1. はじめに

本研究は韓国人ソウル方言話者（以下、KS）が生成する声の高さと語頭の音環境にどのような相関があるのかを調査したものである。KSの日本語発話では語頭の1拍目と2拍目が同じ高さに現れることがある。日本語共通語は1拍目と2拍目の音の高さ（ピッチ）が必ず異なるという特徴を持ち、頭高型でない語の場合、語頭の上昇が見られるが、KSの発話ではこの上昇が実現されていないということである。

2. 先行研究と調査目的

語頭の2拍が同じ高さで発話される要因としてはソウル方言の音声特性が考えられる。シン他（2003）は4音節の韓国語に関して、第一音節が激音・濃音・摩擦音で始まる場合はその音調は「HLLL」（H=high,L=low）または「HLLH」となり、それ以外で始まる場合は「LHLL」もしくは「LHLH」になると述べている。このことからKSの日本語発話においても、語頭の音環境によって語頭上昇のないピッ

チパターンが観察されることが予測される。そこで以下の2点を明らかにすることを目的に調査を行った。①語頭の音環境とピッチパターンにはどのような相関があるか。②アクセントの学習経験によって結果が異なるか。

3. 調査方法

調査協力者は調査当時日本在住のKS、57名で日本語レベルは規定しなかった。調査語は直音で構成される4拍語で1拍目（①母音、②鼻子音+V、③無声破裂音+V、④無声摩擦音+Vの4環境を設定）×2拍目（①母音もしくは有声子音+V、②無声子音+Vの2環境）×4語ずつで計32語である。全て無意味語でこれをランダムに提示し、原則1回ずつ読み上げてもらった。

4. 判定方法

事前にKSの発話100語に関して筆者と聴覚の正常な共通語話者2名とで聴覚判定を行った結果、評定者間の一致が認められたため、全ての音声筆者の聴覚でH/Lの二段階に判定

した。

4. 結果と考察

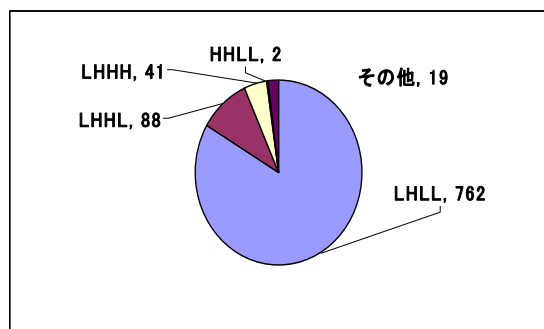


図1. 母音・鼻子音始まりの語の発音

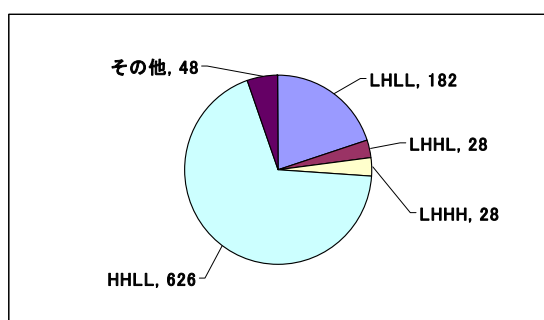


図2. 無声破裂音・摩擦音始まりの語の発音

全体的な結果として、母音・鼻子音で始まる場合、LHLL 型の発話が多く見られた。一方無声破裂音・無声摩擦音で始まる場合はHHLL 型が多かった。アクセント核にはばらつきが見られ、語頭の音環境が影響するのはあくまで1拍目と2拍目の音の高さのみであるが、4拍語では後ろから3拍目に核が置かれる傾向にあった。

次に、KS1 人ずつの発話において、音環境と語頭上昇の有無に相関があるのかを重回帰で求めた。その結果の R^2 値を以下の表に示す。

KS no	R ² 垂	学習経験	KS no	R ² 垂	学習経験
1	754	なし	30	528	なし
2	754	なし	31	714	なし
3	703	なし	32	754	なし
4	0	なし	33	714	なし
5	0	あり	34	0	あり
6	754	なし	35	622	なし
7	590	なし	36	183	なし
8	0	なし	37	349	なし
9	0	なし	38	754	なし
10	0	あり	39	681	なし
11	653	なし	40	590	なし

12	205	あり	41	754	なし
13	800	なし	42	614	なし
14	754	なし	43	754	なし
15	800	なし	44	800	なし
16	0	あり	45	622	なし
17	0	あり	46	800	なし
18	666	なし	47	800	なし
19	251	なし	48	754	なし
20	800	なし	49	800	なし
21	714	なし	50	590	なし
22	417	あり	51	681	なし
23	590	なし	52	800	なし
24	800	なし	53	800	なし
25	754	なし	54	590	なし
26	0	なし	55	754	なし
27	754	なし	56	800	なし
28	754	あり	57	800	なし
29	206	あり			

表1. R^2 値とアクセント学習経験の有無

R^2 値は数値が高い程、相関が強いことを表す。この値は寄与率であるため、「相関なし < x < 相関あり」というように断定的記述はできないが、多くのKSの発話において相関があることがわかる。 R^2 値が0のKSは1拍目と2拍目を異なる高さで発話できているため、音環境との相関が見られなかった。つまり語頭上昇はKSにとって決して習得不可能な項目ではなく、アクセントの学習経験が結果に影響していることも明らかとなった。

6. おわりに

本研究ではKSの日本語発話における語頭の音環境とピッチパターンの関係が明らかとなった。今後はこの語頭上昇の実現されない発話が日本語母語話者にどのように評価されるのかも明らかにしていく必要がある。

7. 参考文献

- シン・ジョン、チャ・ジウン (2003) 『韓国語音声の体系』韓国文化社 p.142, p.146
- 長渡陽一 (2003) 「朝鮮語ソウル方言の音節頭子音と名詞の音調形」『音声研究』第7巻第2号 pp.114-128
- 福岡昌子 (2006) 「韓国人日本語学習者の語頭破裂音を含む語のアクセントパターンについて」『第20回日本音声学会全国大会予稿集』pp.111-116